

シノロジスト・内藤湖南の原点～故郷・毛馬内の漢学教育

野 嶋 剛

目次

- I はじめに
- II 毛馬内訪問
- III 漢学伝統豊かな土地柄
- IV 江戸時代の折衷学派
- V 若き日の内藤湖南と漢学訓練
- VI 漢学伝統を受け継ぐ明治時代
- VII 朱子学の特性と内藤湖南の理論
- VIII 結論

I はじめに

明治から昭和初期にかけて、シノロジー（中国学）の大家として活躍した内藤湖南（1866-1934）は、中国の歴史について有名な「唐宋時代区分論」などさまざまな主題の著作を残し、約20年間にわたって京都大学の教壇に立った。同時に影響力あるジャーナリストとして中国の時局や日中関係に関して活発な言論活動も行っている。また、その学問的関心の延長として、中国書画の鑑識にも長じ、日本における中国美術の普及に力を尽くして『支那絵画史』『東洋文化史』などの先駆的な論考も多数発表している。

内藤湖南は、漢学教育が盛んだった秋田県鹿角市毛馬内で生まれ育った。中国に対する内藤湖南の深い理解の原点には、毛馬内において幼少期から身につけた漢学教養があったことが大きいと考えられる。筆者が行っている内藤湖南研究の一環として、毛馬内を訪れ、その際の体験を出発点に、シノロジスト（中国学者）内藤湖南の漢学教養とその学問的アプローチについて初歩的考察を行うことが、本論の目指すところである。

II 毛馬内訪問

毛馬内は秋田県の南北に広がる長方形の形をした東北の角の部分に近く、岩手県や秋田県とも接する境界の一带に位置する。毛馬内一带は近隣に尾去沢鉦山や小坂鉦山があり、明治から昭和にかけては銅景気に沸いたが、現在は農業以外にはこれといって目立った産業はなく、ひなびた半農村という様子土地柄である。

そこから北に行くと青森県にまたがる十和田湖がある。十和田湖は毛馬内を含めて近辺の人々にとっては県境を超えた地域のシンボルとも言えるもので、古くから信仰の対象にもなっている。

内藤湖南の本名は虎次郎という。当時の人々には号をつける習慣が残っており、湖南は号であった。十和田湖の南にある土地で生まれたことが由来になっている。内藤湖南の父であり、湖南の漢学学習の導き手でもあった内藤十湾（本名は調一）もまた、その入り組んだ湾の形から「十の湾がある」と言われる十和田湖にちなんで号をつけており、土地の人々にとっては十和田湖への思いの強さをうかがわせる。

毛馬内のほぼ中心にある内藤湖南の旧家は、眺望のいい小高い丘の上にあった。家には内藤の表札が掲げられていた。現在も内藤家の子孫が暮らしているという。玄関は簡素な木造の門だが、扁額がやけに大きく、薄く消えかけた文字で、「蒼龍窟」と書いてある。内藤湖南 15 歳のときに父・十湾が建てたものだという。

家の門の脇には「文学博士内藤虎次郎郷宅」の札と「湖南先生旧宅」の碑があり、内藤湖南の上半身の銅像が立っていた。この銅像は比較的最近作られたものようだった。その奥には十湾が一時書斎として使っていた「三余堂」があったが、現時点で書斎として使っているかどうかまでは判然としなかった。

その丘を下ったところに、内藤一家の墓地がある「仁叟寺」があった。内藤湖南の正式な墓は、68 年間の生涯を閉じた京都の古刹・法然院に置かれているが、こちらには湖南の遺髪を持ってきており、祖父の内藤天爵（本名は仙蔵）、父・十湾と共に葬られている。

内藤湖南の墓石は向かって右端にあり、中央が十湾、左端が天爵の墓石となっている。内藤家の墓から 20 メートルほど離れた寺の中庭には、戊辰戦争、日清戦争、日露戦争、第二次大戦でそれぞれ犠牲になった毛馬内の人々を追悼する碑文があったのだが、日清、日露の碑文については、内藤湖南が撰文を記していた。

この仁叟寺の近くで、国道 282 号線とつながる道路沿いに、「内藤湖南先生生誕地」の石碑が立っていた。石碑には「東洋学の権威」とあり、立碑者は「郷賢顕彰會」とある。内藤湖南の生誕地の石碑は、もともと近く別の場所にあったが、土地区画整理事業にともなう道路拡幅によって本来の生誕の地から 20 メートルほど東の場所に移されたとの説明も記されていた。

Ⅲ 漢学伝統豊かな土地柄

内藤湖南が育った毛馬内が属する鹿角地域は、江戸時代までは南部藩の一部だった。南部藩は盛岡に藩の中心となる盛岡城があり、その領地はおおよそ現在の岩手県と青森県東半分に該当する。毛馬内を含めた鹿角という土地は、古くは戦国時代において、南部藩が秋田藩から奪い取ったとされる土地である。ところが、明治維新の結果、紆余曲折はあったものの、最終的に鹿角は再び秋田県に属することになった。

戊辰戦争において、南部藩が佐幕側である東北地方の各藩による奥羽列藩同盟に加わり、秋田藩は奥羽列藩同盟から脱して勤王側についたため、南部藩は秋田藩を憎んで軍を秋田藩内の大館に進めたが、その侵攻の入り口となったのも毛馬内だった。戊辰戦争で敗れて「賊軍」とされた南部藩は「官軍」の秋田藩から「戦果」として鹿角を切り取られたのである。

この戊辰戦争における南部藩と秋田藩との戦いには、父・十湾も従軍しており、内藤湖南は「我が少年時代の回顧」という一文で、当時の様子を以下のように描写している¹⁾。

「三歳の時に明治維新となった。南部藩は会津藩に味方し、官軍に敵対して、南部の兵が秋田藩の領地にまで侵入した。その時、隣郡の十二カ所の町を襲撃して焼き払ったことがあった。これに父は従軍した。自分は毛馬内の鎮守の杜の処で見た。焼ける火を見たという印象は今も記憶して居らないが、人の話によって聞いて居る」

こうした歴史もあってか、毛馬内という土地では秋田に対してどうしてもなじめない感情が残っているとされている。内藤湖南もそうであつたらしいが、実際、今回の訪問で地元の人々と話していると、自らを「秋田人」ではなく、「南部人」と称しており、毛馬内では「南部気質」を現代まで色濃く残していることを実感させられる。

ただ、明治維新後、毛馬内は秋田県の制度に組み込まれており、内藤湖南も17歳の春、秋田師範学校（現・秋田大学教育文化学部の前身）中等師範科に一番の成績で入学している。途中で高等師範科に移籍して、1885年7月、満20歳で卒業し、同年9月に北秋田郡（現・北秋田市）綴子小学校の首席訓導（最上位の教員）になった。明治体制のなかで、1887年に東京に出てジャーナリストとして活動を始めるまで、青年・内藤湖南は南部人ではなく、秋田人として生きていた。

内藤湖南が生まれた1866年（慶応2年）当時、内藤家は南部藩から城代として鹿角に派遣されている桜庭氏に仕えていた。内藤家は父・十湾まで代々、桜庭氏に仕えていたが、禄高はわずか17石に過ぎず、下級武士の地位にあった。

桜庭氏の下にいた家臣たちは老若とも漢学の学問にいそしんだ。その学問研究の熱心な様子から「鹿角学」と地元の人たちが呼ぶほど盛んな漢学重視の風土が生まれ、内藤湖南の祖父・天爵や父・十湾も、この鹿角の漢学の系譜に入っている。

毛馬内には「鹿角市先人顕彰館」という鹿角市の公共施設がある。鹿角出身の偉人を顕彰するための施設で、内藤湖南についての展示が3分の2以上を占めているが、内藤湖南のほかにも魚が棲まない湖だった十和田湖でヒメマス養殖を成功させた和井内貞行についての資料も展示されている。

その展示室の一角に、一枚の系譜図が張ってあった。鹿角出身で内藤湖南顕彰会初代会長の高橋克三氏が、旧南部藩時代の鹿角出身の漢学者について系譜を調べて『近世鹿角郡学統考』を著したときに作成したものだという。

系譜全体は少々複雑なものなので、内藤家に関する部分に絞って簡略化すると、「山本北山 - 朝川善庵 - 内藤天爵 - 内藤十湾 - 内藤湖南」という流れになっている。

内藤湖南の祖父・天爵はもともと内藤家の生まれではなく、9歳のときに養子として内藤湖南の曾祖父にあたる官蔵のもとに迎えられ、二つ年下の長女辰子と結婚した。天爵は野心にあふれ、学問的能力も高く、従来の穏やかで地味だった内藤家の家風を一変させたと言われる²⁾。

天爵は大変好学の士であったようで、幼いころから漢文を学んだほか、医学や兵法にまで手を出した。主君の桜庭氏に従って江戸を訪れ、漢学者・朝川善庵の門をたいた。その時期や年齢は明らかではないが、20代から30代にかけてのことだったはずである。鹿角に戻ったあとは桜庭氏の子弟の教育係になり、私塾も開いて鹿角の人材の育成を図った。その門下からは多くの能吏を輩出し、内藤家の名前を高めたという。

系譜には、もう一人、内藤家と深い関わりを持つ泉沢家の次男である泉沢牧太（履齋）という人物も載っている。

泉沢牧太は泉沢家の次男として生まれ、父親の薫陶を受けながら27歳のときに江戸に遊学。前出の朝川善庵に入門して、刻苦勉強に励んでその高弟となるに至った。1806年（文化3年）には水戸に漂流した清国人を長崎に送還することに成功し、伊勢亀山藩で儒官となるなど毛馬内の出世頭となり、同世代の天爵とも同じ朝川一門に学ぶようになった。

泉沢牧太の兄にあたる泉沢織太は、牧太と違ってもとより毛馬内にとどまり、塾を開いて郷土の士たちの教育にあたった。織太の長男である恭助（号・修齋）は幼少より優秀の誉れ高く、父の開いた塾をさらに発展させ、鹿角第一の儒者と称された。内藤湖南の生母・容子は恭助の娘にあたり、内藤湖南からみれば恭助は祖父ということになる。

恭助は儒学を学んだだけではなく、絵画もたしなんだ。その技は趣味の域を脱していたといわれている。恭助の習作は毛馬内の旧家に所蔵されており、先人顕彰館でもしばしば借用展示している。

内藤湖南は、この恭助から多くの面で深い影響を受けたようで、こう記している。

「我が外祖を泉沢修齋翁とす、篤学醇厚の君子にておはせしとぞ、一郷の先進といって我郷にて文字を解する者は翁の薫陶を受けざるはなし、僻郷書に乏しければ、翁は皆手から写され

し由にて、蔵書数百卷、過半は写本なり、我が幼時泉沢家より借りて読みしも皆翁の手沢なりき、我が五歳の時身まかられしかば、音容は定かに記えねど、姉上と共に喪に走りし時のさまおぼろげに臆に存するなり」³⁾。

IV 江戸時代の折衷学派

江戸時代の漢学には、朱子学、陽明学などのさまざまな流派があったが、そのなかに、必ずしも朱子の解釈に盲目的に従うことを潔しとせず、自ら文献にあたって論説を実証することを旨とする折衷学派と呼ばれる一派があった。

天爵が師事したこの朝川善庵と、その朝川の師にあたる山本北山についても前述の系譜図に名前が載っているが、朝川と山本は、いずれも当時、漢学の一派として影響力を持ったこの折衷学派の中心人物である。

折衷学派の由来については、創始者は井上蘭台という漢学者で、その弟子が山本北山の師にあたる井上金峨だと言われている。井上蘭台も井上金峨も、さまざまな思想家の意見を柔軟に取り入れるべきだとして「経義折衷」の重要さを説き、自らの学問は朱熹（朱子）、王守仁、伊藤仁斎、荻生徂徠を折衷したものだとして表明したことから、折衷学派の名前が生まれたとされている⁴⁾。

山本北山は江戸中期の儒学者で、井上金峨の講義を若いうちに聴講し、その後、荻生徂徠の古文辞学なども修め、師には就かず、独学で自らの学問を為した。資産家であったこともあって大量の書を集めて博学となり、私塾を開いて門人は数百人に及んだ。

朝川善庵は江戸後期の儒学者で、12歳のときに山本北山に入門。その後、長崎や薩摩に赴いてその博学が知られるようになり、平戸藩主や大村藩主などの大名が門人となって、後に私塾を江戸に開いた。その私塾の門をたたいたのが、内藤湖南の祖父・天爵だったので、鹿角の漢学もこの折衷学派に属すると言える⁵⁾。

この折衷学は、清朝で主流だった考証学から大きな影響を受けていた。考証学の中心は儒教経典、つまり経書の実証的研究にあった。孔子の尊厳性や儒教の至高性を前提にしながら、实事求是、つまり広く論拠を求めなければならないと考えるものだ。経書自体の研究も怠らないが、経書と時間的に接近する諸子百家の書からも引証することを求めるなど、何事についても厳密な博引傍証を強く求める性質があった。

V 若き日の内藤湖南と漢学訓練

祖父や外祖父の時代に漢学者として名声を築いた内藤家だったが、戊辰戦争に敗れて明治維

新によって「賊軍」とされた主家の桜庭家は毛馬内にいられなくなり、父の十湾も士族の地位を失った。同時期に、内藤湖南の母、兄などが相次いで亡くなる不幸も起きて内藤家にわずかに残された田畑で農業を営むこともままならず、内藤家は生活面では苦しくなり、十湾は臨時教員や尾去沢鉦山の事務をしながら内藤湖南を育てた。

ただ、鹿角の恵まれた漢学環境のもと、十湾の熱心な教育指導もあり、内藤湖南は幼いころから漢学の教養を順調に積み重ねた。漢文では『二十四孝』、「四書」の素読で『論語』を読み終え、毛馬内に近く、鉦山があった尾去沢の尾去沢小学校（又新学校＝当時）に入学した9歳の段階ではすでに『孟子』に進んでいたという。このとき、すでに他の同世代の小学生を圧倒する教養を身につけていた内藤湖南は教師の手伝いをして同級生たちを教えていたという。

12歳では頼山陽の『日本外史』を教わった。『日本外史』は非常に難解な書物で最初は苦戦したが、内藤湖南は一年であらかた読み終えたという⁶⁾。12歳のときには漢文で書かれた様々な文献を読み始めた。13、14歳のころには『春秋左氏伝』『莊子』など手当たり次第に自宅にある蔵書の漢籍を読むようになり、父・十湾は内藤湖南に作詩を教え、漢文を書かせている。1881年（明治14年）に行われた明治天皇の東北巡幸の際、漢文で奉迎文を書き、周囲を感嘆させたという逸話ものこっている。

17歳で入学した秋田師範学校では講義やカリキュラムに非常に失望していたことが、父・十湾に対する書簡に詳しく書かれているが、その最大の理由は師範学校での教育内容が郷里で身につけた学問の水準を大きく下回っているように思えたためだった。

このような学問的な早熟性は、内藤湖南と並んで京都大学で教鞭をとったシノロジスト・狩野直喜など同世代の学者にも共通している。これは、江戸時代の漢学教育の伝統が残っているなかで可能だったもので、明治初期に政府が制定した教育カリキュラムで西洋式の学問体系が導入されるようになると、幼少期から漢学を暗記方式で徹底的に学んだ日本人は姿を消していくことになる。

VI 漢学伝統を受け継ぐ明治時代

明治維新には漢学者の失業という一面があった。幕藩体制における漢学はいわば「公的教育」の体系に位置づけられていたが、明治政府は1972年（明治5年）5月、全国統一的な「学制」を發布した。欧米の学制を参考に近代的な学校制度を定めたもので、私塾・寺子屋の閉鎖や旧藩学校の廃止により漢学者で失職する者は多数に及んだ。

ただ、この学制はあまりにも漢学の伝統を一気に否定したもので、時代にそぐわないということで1879年（明治12年）に廃止され、新たな「教育令」が發布され、漢学は一定の命脈を保ったが、制度としては総じて洋学に取って代わられることは時代の趨勢であった。

ただ、日本社会に漢文がそこまで広がったのはそれほど古くはなく、江戸時代に入ってからである。江戸幕府は武家社会の觀念に残っていた主君への裏切りを是とする風習を根絶するため、主君への従順を旨とする倫理觀を武士たちに持たせようと漢籍を大量に日本に買い込み、朱子学の導入も進めた。最初は上からの漢文導入であったが、やがて町人の間にも漢文の素養が広がるようになって一気にすそ野を広げた。

江戸中期になると、儒学者にも新井白石や荻生徂徠、雨森芳洲などの優秀な漢学者を続々と輩出して、上流知識階級である公家や寺家、学者は基本的に純正漢文の読み書きができたのである。漢文教養がなければ漢学者や国学者はもちろん、蘭学者にもなれなかった。杉田玄白が書いた西洋医学書「解体新書」も純正漢文によって書かれていた。読書、作文といった知的活動はすべて漢文によって支えられていたのである。

明治維新になっても当時の知識人や政府の高官たちの間には「漢学愛好」の傾向は依然根強く、明治政府の屋台骨を担ったのは、もとをただせば各地の藩校で漢学を学んできた俊英たちであった。彼らの価値觀や教養の基礎は漢学によって形成されており、彼らの漢学的教養をもとに作られる用語も、基本的には漢語調の言葉となった。

例えば、明治維新前後に起きた大事件について「大政奉還」「廃藩置県」「王政復古」「文明開化」などの四字熟語が非常に多いことは、決して偶然ではなく、当時の人々にとっては漢語的な表現で現象を説明することに慣れていたのである。

当時の固定化された幕藩体制による移動性の低い社会から、全国諸藩の出身者が東京に入り乱れるようになった明治維新後の社会が変わると、人々の間で言葉のなまりや語彙の違いからコミュニケーションに困難が生じた際、漢語的な表現によって考えを相手に伝えることが流行し、例えば風呂に入ることを「入湯」、不都合をしたときに謝るときの「失敬」など、新たな漢語的な語彙が上流階級の間で流行語となったのである。このことは、漢字の「共通語的性格」が大いに作用したと見るべきであろう。

言うまでもなく漢字は甲骨文字として誕生した。中国古代の殷や周の王権は、文字は青銅器などに刻みこみ、その支配体制の意義を、地方の豪族たちに伝えて服従を誓わせた。当時の中国は、漢民族とも呼べぬような集団が入り乱れて言語的な一体性はなかったとされる。そのなかで、書き言葉としての漢字の重要性が存分に発揮され、漢民族としての一体性を育てることに大きな役割を果たしたのである。その後、北方から南方まで相互の言語が通じないような状況は、清朝どころか辛亥革命後まで続いたのだが、漢字によるコミュニケーションが成立していたことで中国は一体性を保っていたのである。

中国大陸において、出身地域を越えて会話によるスムーズな相互理解が可能になったのは1949年の新中国の成立を受け、実施に移された標準語教育が広がってからだと言われている。それ以前は、中国においては、表意文字である漢字を通じた「筆談」がいわば共通語としての

役割を発揮していた。その中国的な現象が、この日本の明治維新期において日本人同士の間に出現したことは非常に興味深いことだと言える。

同時に、漢文の「共通語的性格」については、当時の日本人と中国人とのコミュニケーションの確立においても大きな役割を発揮している。

例えば、鎖国時代にあった江戸幕府の下であっても、日本には朝鮮国王から「朝鮮通信使」が派遣されていたが、日本側の文人とお互いのプライドをかけて漢詩の表現を競い合ったとされている。日本にきた朝鮮人たちはもともと日本の文明を見下す傾向があったが、江戸時代以降はむしろ日本人の漢籍への深い理解に驚き、尊敬の念を持つようになったと言われている。

明治時代に入っても、中国革命の父と言われる孫文が、宮崎滔天や犬養毅など明治期の日本の孫文支援者や友人たちと主に筆談によって意志疎通を図っていたことは知られている。漢学教養を持った日本人と中国人の間では、筆談を通してほぼ自由に相互の主張を理解することが可能だった。

内藤湖南もまた、そうした漢学教養の恩恵を受けた一人で、訪中するたびに多くの政府高官や学者、美術関係者と筆談によって関係を築いた。例えば、内藤湖南が初めて中国を訪問したとき、天津において嚴復、王修植などの清朝末期において高い知名度を誇っていた知識人と面会を行った際の体験について、「一夕の談ずる所、多く筆を以て舌に代へたれば」として、ほとんど筆談によってかなりの高度なコミュニケーションを果たしたことを、内藤湖南はその旅行記『燕山楚水』に書き記している⁷⁾。

Ⅶ 朱子学の特性と内藤湖南の理論

内藤湖南の一連の著述活動においても、幼少期より影響を受けた漢学の影響が認められる。

内藤湖南が育った鹿角において主流であった折衷学は18世紀に大流行して日本の漢学界の一角を占めた。折衷学の特徴は経典を参考にしながらも各人が厳しく史料批判を行っていくもので、個性的な学説を生み出すことから「一人一学説」とも言われていた。一方で、文献の海に埋もれてしまう危険もあって、誰もが後世に影響を残すような学説を発見できるわけではなかったが、しばしば内藤湖南のような異能の知識人を生み出していた。

内藤湖南は生涯のなかでユニークな学説を次々と世の中に問うた。よく知られているのは「唐宋時代区分論」で、ここで内藤湖南は唐代までを中世、宋代からを近世とした。この考え方は、今日でこそ日本でも中国でも中国史の歴史区分における主流の考え方となっているが、内藤湖南が発表した当時はきわめて革新的な考え方だった。

これは、多くの経典・史料にあたったうえで、独自の解釈を編み出すことをその学問的態度とする折衷学派の伝統が、内藤湖南という人材に出会い、大きな花を明治に咲かせたと考える

ことができるだろう。

内藤湖南は学問のあるべき姿について「多所見，少所断」（見るところが多く，断ずるところが少ない）と語っている。これは中国語の成語である「少所見，多所怪」（見るところ少ないと，驚くところが多い）を言い換えた内藤湖南の造語である。

内藤は日本人学者の欠点として，知識や見聞が足りないのに何事も断定的に語りすぎるとして，「我邦学者の弊なるか，其議論断制，之を支那人若しくは欧米人に比するに，主我の見太だ強く，其幼学習慣の薫染より生ずる偏局の定説先ず胸中に横はるありて，誤て之を名けて見識と為し，爾せしより後，読む所の書，一切箇の自ら名くる見識に抛りて判断し，其の見識と合わせざる者は之を容るるを欲せず，又之を信ずるを能はず」と書いた⁸⁾。自分の先入観にこだわって他人の意見に耳を傾けず，「少所見，多所断」だとしているのである。

学者とはその反対の「多所見，少所断」であるべきだというのが内藤湖南の立場だった。多くの資料や経典を広く参照したうえで独自の見解を持つべきだという折衷学，あるいは清朝考証学の方法論に内藤湖南が深く影響を受けていたことの証左であろう。

VIII 結論

内藤湖南が学齢期を迎えた時期はすでに江戸時代が終わりを告げ，明治維新を迎えた後ではあったが，内藤湖南の故郷・毛馬内における江戸時代の漢学的教養の伝統は，漢学者の家系である内藤家の教育のもと，着実に内藤湖南の中に引き継がれた。

内藤湖南はその漢学的教養を生かして中国人と同じように自由自在に漢籍を読み，中国人とは「筆談」でコミュニケーションを取った。そして，内藤湖南の学問的な方法論には毛馬内で学んだ折衷学的伝統を引き継ぐ漢学の影響が深く及んでいることを，内藤湖南自身の業績や発言から探し出すことが可能である。

江戸時代における漢学的教養は，朱子学を主体としており，一部の人々は陽明学を用いていた。朱子学も陽明学も本質的には「理学」であり，議論の仕方も理詰めすぎるほど理詰めには徹していた。その意味で，幕末明治の知識人たちは，漢学によって「理詰め判断」による事象の理解に長じているという特色を有しており，すでに洋学の受容に必要な思考力や判断力を有していたと言われる⁹⁾。

幕末から明治にかけて，素養としての漢学は，欧米の学問を吸収する道具として機能したのはもとより，当時，日本では東京大学と京都大学を中心に立ち上がったシノロジーが漢学の再編成の中で成立し，多数のシノロジストを誕生させている。これら日本のシノロジーの草創期における中心的学者は内藤湖南をはじめ，大半が明治維新前の江戸時代末期に漢学的な教育を受けた経験を持つ者だった。シノロジストたちは，従来の漢学の教養という土台に，西洋的学

問の方法論を取り入れ、シノロジーを発展させていったのである。

漢学の盛んだった故郷・毛馬内において、幼いころから中国の経典を学んだ若き漢学者から、同時代の中国に関心を持つシノロジストへと生まれ変わった内藤湖南の学問的成長とその業績は、江戸から明治にかけての時代的变化のなかで、漢学教養を近代日本の学問体系に適応させた当時の知識人の代表例と見ることができるだろう。

注

- 1) 内藤湖南「我が初年時代の回顧」『内藤湖南全集第二巻』（筑摩書房, 1997）,699.
- 2) 三田村泰助『内藤湖南』（中央公論社, 1972）,16.
- 3) 青江舜二郎『竜の星座：内藤湖南のアジア的生涯』（朝日新聞社, 1966）,28.
- 4) 倉石武四郎『本邦における支那学の発達』（汲古書院, 2007）,61.
- 5) 小川環樹編『日本の名著 内藤湖南』（中央公論社, 1984）,10.
- 6) 「内藤湖南の学問とその生涯」小川環樹編『日本の名著 41』（中央公論社, 1984）,10.
- 7) 内藤湖南「燕山楚水」『内藤湖南全集第二巻』（筑摩書房, 1997）,30.
- 8) 内藤湖南「読書に関する邦人の弊習附漢学の門徑」『内藤湖南全集第二巻』（筑摩書房, 1997）,166.
- 9) 村山吉廣『漢学者はいかに生きたか』（大修館書店, 1999）,6.

（野嶋 剛, 朝日新聞記者, 京都大学非常勤講師）

The starting point of Sinologist, Konan Naito: old Chinese study in his hometown, kemanai

From the Meiji era to early Showa, Konan Naito (1866-1934), who was known as a very influential Sinologist, played an important role in the establishment of modern Sinology in Japan. He had a rich knowledge of classic Sinology and old Chinese text books through intensive education by his family in Kemanai, Kazuno city in Akita Prefecture, where Naito was born and which had a strong tradition of classic Sinology in the Edo era. These research notes will focus on the impact on Naito's studies that resulted from his classic Chinese understanding.

(NOJIMA, Tsuyoshi, Asahi Shimbun senior staff writer, contract lecturer of Kyoto University)

